

「新しい文化政策プロジェクト」勉強会

第6回ショートレポート

日時：2020年12月5日 15:00~16:30

方法：オンライン

参加者：プロジェクトメンバー6名、メンバー外2名、学生2名

12月に実施した勉強会では、「いわゆる『音楽は世界の共通語だ』的な音楽認識について」というテーマで奥中康人氏から話題提供があり、日本における西洋音楽の社会的な受容の経緯や、鑑賞の問題、芸術を理解するとはどういうことか等多角的に議論が進んだ。

多くの人が耳にしたことのある『音楽は世界の共通語だ』というフレーズの持つ強権性や特異性について、それがうまれた歴史的な背景と共に理解を深め、文化に関する言説を丁寧に見直す機会を与えてくれた。

『音楽は世界の共通語だ』の元になったのは、アメリカの詩人ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882）の“Music is the universal language of mankind——”という文章ではないかと奥中氏は指摘する。

ベートーヴェンの音楽を理解するためには、18世紀後半の音楽上の文法やルールといったある種の知識が必要であるにもかかわらず、それが「学習しなくても理解可能で普遍的」なものであるかのように説明されるようになったのは何故か。ヨーロッパの人々は、キリスト教を通して讃美歌やオルガン音楽を受容し、五線譜という共通のフォーマットを持つ。しかし、西洋音楽の影響下にある音楽教育や日常生活を送り、五線譜さえ読めればなんとかなる（日本を含む）西洋音楽圏と、それらの影響を受けていない非西欧圏の音楽は異なるものであると奥中氏は述べた。

特に、日本における西洋音楽化の経緯は、重要な指摘であった。明治期にやってきた西洋人は、日本の伝統音楽（能、歌舞伎音楽、雅楽等々）を野蛮な音楽として全く理解せず、工芸に対するものとは異なり罵倒してきた。その後、1890年頃から日本の西洋音楽教育が始まり、1940年頃には日本人にとってはドレミファソラシドが音楽であるという認識が形成された。これらの素地により、『音楽は世界の共通語だ』というフレーズは、日本においても広く流布したと考えられる。

加えて、「音楽は世界の共通語だ」という認識が広まったことによる日本のクラシック偏重の文化政策への疑問や、非西欧圏でのヨーロッパ音楽化の進行によるローカルな独自文化への影響についての懸念が述べられた。

ディスカッションでは、『音楽は世界の共通語だ』という言説の持つ複雑性や、感覚・感性と理解の問題等が議論された。

『音楽は世界の共通語だ』と述べられることで、音楽は誰もが理解できるかのようなイメージが形成されるが、一方で現実には理解できないことで劣等感を生じさせ、違いに目を向けることがなくなるという弊害も生み出している。また、ゲスト参加者の五月女氏や蔭山氏が述べたように、美術においても、音

楽と同様の状況にあり、美術史の知識や作品の背景にある意図を知らずとも、それぞれの感性によって理解できるとする鑑賞傾向がみられる。蔭山氏の、入口のハードルを下げて、作品の定義をあいまいにすることで、逆に価値を下げることにつながる場合があるという見解は示唆に富んだものだった。

鈴木氏が指摘したように、「現代は、得られる情報が限定的で一部の知識人によって教養として音楽が述べられた時代とは異なり、好みが細分化しスタンダードや普遍性が成り立たない時代」だ。また朝倉氏やゲスト参加者の河村氏が指摘するように、異なるという前提を理解し、それぞれの良さを認めるという姿勢は、現代における文化的な多様性の享受には必要不可欠であろう。個人的には、だからこそ不安定な社会状況において、一見ポジティブで多くの人と共有できる理想のように見えるフレーズにはひきつけられる人も多く、注意が必要であるとの認識を新たにした。

また、個人的には、佐野氏が指摘したように「言語を用いない共通語としての音楽」の可能性を否定することはできず、芸術を鑑賞する際には知識や経験を越えた圧倒的な「何か」があるのではないかと常に期待している。芸術を理解する、とはどういうことかを改めて考え直す機会となった。

いずれにしろ、「大きな文化政策」がどのようなものかを考える上で、『音楽は世界の共通語だ』のように一見大きな希望を述べているかのようで、逆に多様性を不可視化するような言説とは異なる形で、私たちは解を見つける必要があるだろう。

(文責：山本麻友美)